

参考人提出資料

1	谷 参考人	・・・・・・・・・・	1
2	梅津 委員	・・・・・・・・・・	3

「農協のあり方についての研究会」への意見書

京都府：谷 則男

今の農協は、信用・共済事業による収益に依存し、どちらかというと言農・経済事業はおろそかになりがちであると思います。農協法が改正され、営農が第一になったのですが、現場ではそのような意識は皆無と言ってよいでしょう。農協の経営陣は、収支を合わすことに必死になり、簡単に収益が上がる信用・共済事業にしか興味がないのです。農協という組織は、株式会社等とは違い、利益を追求するだけの組織ではないと思います。もちろん、赤字経営では良くないのは当然のことですが、なにか勘違いをして利益追求に走っているのか、もしくは、本業である営農・経済事業でよい成績を上げられないために、信用・共済事業に頼り過ぎているのではないかと思われまます。

私の農協でも、近年の経済状況の中、なんとか生き残りをかけて人員削減や支店の統廃合を進めていますが、一番最初に対象となってくるのは、営農・経済関係の部署です。私たち農家組合員が、農協の信用・共済事業を利用するのは、何と言っても営農・経済事業で世話になっているという思いからです。この様な状況が続くのであれば、農家組合員はますます農協から離れていくでしょう。

今、農協の存在意義が大きく問われています。このことは、私たち農家組合員にとっても、今一度農協とどのようにかかわっていくのかを、考えるよい機会ではないでしょうか。

私が今、農協に対して思っていることをまとめました。

「農協改革」

役職員の意識改革

役員選任の透明性

組合員外からの役員登用

役員、職員、組合員の研修

徹底した情報公開

「営農」

これからは技術指導ではなくマーケティングを主に
安全・安心のためのトレーサビリティの指導
コンプライアンスの指導
現場主義

「経済事業」

顧客の差別化
流通改革
取り扱い商品の見直し
量より質
徹底した情報公開

「担い手対策」

担い手の定義の明確化
経営参画
次世代組合員の利用率向上

「地域での農協の役割」

少子高齢化社会のなか、農協は地域のコミュニティーの中心となるべき
組合員だけでなく、子供や高齢者の生涯学習の一端を担う
組合員以外の利用率向上

「農協のあり方についての研究会」への意見書

山梨県：（有）イズミ農園社長 梅津鐵市

1．戦後の食糧難の時代が終わり、大量消費の時代から少量多品目の時代になり、二十余年前から食に対する安全性が問われる中、農村における司令塔たる農協が、特に、ここ20年の間に大きく変化した社会情勢についてこれなかったことが、農協の衰退になっていると思います。

今から20年少し前までは、農村生活者の中心は農協であったはず。それは、農業で生活をしている人達が多かったからではないでしょうか。

現在、私の住んでいる大泉村には世帯数1749（もともとの農家数は1000弱と思います）ありますが、農業が生活の中心になっている世帯は20戸あるでしょうか。

つまり、農村における生活者が、農業生産者から農村生活者に変わっていったのです。農協は、この変化を捉えていないように思います。

この時、もう一つ大きな間違いを犯していると思います。この時代の変化に気づいた農家を、農協の中に取り込まなかったことも、農協衰退の原因の一つだと思います。

- 1) 農協の外側で農業をやっている人達の意見や思考をどしどし取り入れる。
- 2) 農家も生活者なのだから、生活者の視点に立って農村の良さを見つけ直す。
- 3) 違う視点を持った人材の起用（理事を含めて）。

2．消費者ニーズの多様化が言われ、少量多品目化が言われ20年くらい経過しているが、生産現場は、消費者ニーズに合ったようになっているとは思えません。

- 1) ニーズは時代変化に応じて作り出していくもの。
- 2) 生産者の意識によって、販売方法を変える。
- 3) 地域食品産業との連携。

3 . 資材の仕入れは、基本的に系統は上手とは思えない。

4 . 農協も行政も大型プロフェッショナル集団育成を真剣にやらないと、日本農業の先は芳しくないように思います。

私のイメージする大型農業

稲作 30 ha ~ 300 ha

畑作 10 ha ~ 100 ha

果実 3 ha ~ 30 ha

施設 施設は上記の作型との組み合わせで使う 1 ha ~ 30 ha